

開港のひろば

編集・発行／横浜開港資料館

〒231-0021 横浜市中区日本大通3 電話(045)201-2100

ホームページ <http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

Number

151

発行 日／2021年(令和3)4月24日(土)

印刷／中川印刷株式会社



図1 「万国人物図」に描かれたイギリス人 正保年間(1644~48) 当館蔵

企画展

七つの海を越えて 「鎖国」下の日本とイギリス

日本、そして横浜の近代史のなかで大きな存在であり続けたイギリス。近年、両国は政治・経済・安全保障といった幅広い分野でふたたび緊密さを増しつつあります。

一九八一年、旧英国総領事館の敷地に開館した当館は、日英のつながりを示す歴史資料を積極的に収集し、また調査研究を積み重ねてきました。開館四〇周年を記念して開催する「七つの海を越えて」展では、日英関係の黎明期とも言うべき江戸時代(一六〇〇〜一八六八年)に目を向け、イギリス人が見た日本の様相と日本人の観察によるイギリス人(人)の姿を二期(Ⅰ期…江戸時代

初期〜後期 Ⅱ期…幕末期)にわけて紹介します。

ところで、開港期以降の歴史をメインに扱う当館ですが、所蔵資料のなかには開港以前の、いわゆる「鎖国」と呼ばれてきた時代の対外関係資料も相当数含まれており、質量ともに充実した内容となっています。

Ⅰ期の「鎖国」下の日本とイギリス」では、これまで紹介する機会がさほど多くなかったこれらの資料から、日英関係のあゆみとその背景をたどれるものを選び抜き、その歴史的展開をわかりやすく解説します。

かつて、「鎖国」をしていた江戸時代の日本は外国から閉鎖した社会であった、という見方がありました(あるいは現在でもこの見方は根強く残っているかもしれません)。このような見解は近年の研究では否定されており、むしろ関係していた国々や民族とのあいだに生じた豊かな交流が注目されるようになっていきます。いずれにせよ、横浜開港に先立つこの時代の外国との関わりの実態を知ることが、開港の意味と現在の日本の国際的位置を確認するためにも重要なのではないのでしょうか。

Ⅰ期では、いくつもの大洋を越えてむすばれたこのふたつの国のつながりの果実を、一七世紀はじめから紹介したいと考えています。

(吉崎雅規)

七つの海を越えて

17~18世紀の日英関係

セーリスの来航と謁見

慶長一八年（一六一三）五月五日、イギリス東インド会社の第八航海として、ジョン・セーリス（John Sarris）を指揮官とするクロープ号が平戸に到着した。セーリスは日本と貿易を開くことを目的として、国王ジェームズ一世の国書を携えてきたのである。旅の経過については、セーリスが記した日記が伝存し、それを後年（一九〇〇年）、『ジョン・セーリスの日本への航海、一六一三年』（“The voyage of Captain John Sarris to Japan, 1613”）とのタイトルで出版したのが、この年まで駐日イギリス公使をつとめたアーネスト・サトウである。セーリス一行は七月二日に平戸を出発。八月四日、駿府で徳川家康と謁見し、国書を奉呈する。続いて一三日には江戸で二代將軍徳川秀忠に拝謁した。家康はセーリスに朱印状をあたえイギリスとの交易を許可する。すでにイギリス人のウィリアム・アダムス（三浦按針）が家康の外交顧問として活躍していたが、日英の公式な貿易関係はこのときに初めてはじまったのである。

ところで、セーリスが徳川家康と秀忠と謁見した事実は、約二五〇年後の幕末に重要な意味を持つてくることになる。安政四年（一八五七）、幕府はアメリカ使節タウンゼンド・ハリスを江戸に迎え入れるかどうかで紛糾していた。「鎖国」下の江戸

に欧米の外交使節が入った事例はなかったからである（オランダ商館長は商人という扱い）。しかし、幕府は「寛永以前にイギリス人等にたびたびお目見えを仰せつけた」（御先蹤（先例））がある」ことを理由として、ハリスの江戸入りを許したのである（吉崎雅規『幕末江戸と外国人』）。

イギリスは元和九年（一六二三）に対日貿易から撤退しており、その初期の関係はわずか一〇年で幕を閉じていた。しかし、その日英のつながりは、幕末に外国人を江戸に再び迎え入れるときの助けになったのである。

一七世紀後半の日本とイギリス

寛永一六年（一六三九）、幕府はポルトガル船の来航を禁じた。また、オランダ・イギリス人と日本人とのあいだに生まれた子をジャカルタに追放する。寛永一八年には平戸のオランダ商館を長崎出島に移転させ、オランダ・中国船の来航は長崎に限定されることになった。しかし、イギリスとのつながりや情報が完全に断たれたわけではなかった。

オランダ東インド会社は、ヨーロッパから毛織物、油絵、時計、眼鏡などをもたらした。それらのなかには数量は多くないもののイギリス製の毛織物が含まれていた。たとえば、明暦三年（一六五七）の輸入品目には、イギリスの緞子（Engelne dinsten）九五反が含まれている

（石田千尋『日蘭貿易の史的研究』）。また、幕府は寛永一八年以降、オランダ商館長にヨーロッパを含む世界情勢の報告を義務づけるが、そのなかにはイギリスの情報も見られた。たとえば慶安三年（一六五〇）の風説書では、イギリスの清教徒革命について、「宗教に反対して起つた流血の内乱に由来するもので、（中略）国王並に議会は、今に至るまで既に九ヶ年に互つて戦つてゐる」とその原因と経過について述べ、「我等の宗教（新教）である議会は国王に反抗して起ち、遂に戦争中に国王を捕へて断頭台上に送つた」と国王チャールズ一世の処刑（一六四九年）を報知している（『和蘭風説書集成』）。幕府は寛永期以降もイギリスに無関心だったわけではなく、イギリスを含むヨーロッパ勢力の動静に目配りをしていたのである。

このようなか、イギリス船が久しぶりに日本に姿をあらわす。延宝元年（一六七三）五月二五日、イギリス東インド会社が派遣したリターン号が、長崎湾に入り錨をおろした。船長はサイモン・デルボア（Simon Delboe）で、イギリス国王チャールズ二世の親書を携えていた。デルボアは通商再開の希望を長崎奉行岡野貞明に伝え、岡野は江戸の幕閣に指示をあたうた。実のところ、岡野は通商

の許可はおろるだろうとみており、その観測をイギリス側にも伝えていた。幕府はポルトガル・スペイン船の来航は禁じていたが、それ以外の国籍の船については方針を示していなかったのである（松尾晋一『江戸幕府と国防』）。結果としてイギリスの希望は拒絶されるわけだが、その通商要求は認められるだろうと長崎奉行が考えていたことは重要である。リターン号来航前の日本では、イギリスを受け入れる可能性がないわけではなかった。

イギリスへのまねが

このころの日本人はイギリスをどのように視ていたのだろうか。江戸時代の前期・中期に刊行された図や本から、イギリス（人）について書き



図2 「万国総界図」 石川流宣図 宝永5年（1708）当館蔵



図3 ミアズ『中国からアメリカ北西岸への旅』
1792年(仏語版) 当館蔵

あらわしたものを紹介してみよう。
江戸時代前期、正保年間(一六四四〜四八)に長崎で刊行されたとみられる「万国人物図」(作者不詳)には、世界各国の人物の容貌・服装が男女一組ずつ描かれるが、このなかに「いんげれす」と記されるイギリス人の姿もある(1頁図1)。また石川流宣の作図した「万国総界図」(図2)にはヨーロッパもあらわされるが、そのなかにイギリスも示されている。「紅毛」と太く表示されたオランダほどの存在感はないが、ヨーロッパ大陸にほど近い島国であることは認められる。
海外情報が多く流れ込んだ長崎にはヨーロッパ、そしてイギリスに知識を持つものもあらわれた。町人学者・西川如見もそのひとりで、宝永五年(一七〇八)に著した世界地理

書『増補華夷通商考』のなかに「エゲレス」の項目を立てている。西川は、イギリス人が「人物ラランダニ似タル由」とオランダ人に容貌が似ていることを指摘し、「昔ハ平戸へ年々入津セシカトモ商売利無キ由ニテ手前ヨリ退テ不來」と、平戸から貿易の利潤がないために撤退したことを記している。

また、如見の意を受けて息子の西川正休が執筆した『長崎夜話草』(享保五年(一七二〇))では、「諸厄利亜国は紅毛国に近き島国にて豊饒の水土およそ日本程の国なるよし」と日本と土地柄が似ていることを指摘し、「此国の人は紅毛よりは義強く心猛き風俗にて、貪るころ(心)すくなきにや。おのれよりねがひて渡海を止めしも世のいきほひを能見知たるゆへにやと覚ゆ」と、オランダ人よりも「義」が強く貪欲ではないこと、世界情勢を見極める力があることなど、その性向を高く評価している。

毛皮とイギリス船の来航

一八世紀後半、アメリカ北太平洋岸に棲息するラッコやビーバーの毛皮をめぐって、イギリス商人は、ロシア・アメリカ・スペインといった欧米の商人としてのぎを削っていた。ビーバーの毛皮(内毛)を素材としたフェルト帽がヨーロッパで人気を博す一方、ラッコの毛皮は中国人に



図4 毛皮を着たアラスカの人々
F. Beechey "Narrative of a voyage to the Pacific and Beering's Strait"
1831年 当館蔵

強い需要があったことから、一七八〇年代以降、イギリス商人たちは北米で入手した毛皮を貿易品として中国に持ち込むようになっていた。近年、この太平洋沿岸をつなぐ壮大な毛皮交易と日本のかかわりが研究者から注目されるようになっていく。

寛政三年(一七九一)七月一日、イギリス人ジェームズ・コルネット(James Colnett)が指揮するアルゴノート号が、北米産の毛皮を積み博多湾に入った。毛皮貿易の拡大にあたり大きな役割を果たした貿易商人ジョン・ミアズ(John Meares)が、コルネットに朝鮮・日本で毛皮の販路をひらくよう命じたのである。リターン号以来のイギ

リス船の来日であった。コルネットの要望は日本側の拒絶にあって果たせなかったが、ミアズは一七九〇年にロンドンで、北太平洋の航海記を出版する("Voyages made in the years 1788 and 1789, from China to the North West Coast of America")。そのなかで、「ミアズは毛皮貿易の販路を中国のほか、日本・朝鮮にも拡大できる可能性を述べた(横山伊徳『開国前夜の世界』)。毛皮という「世界商品」の発見とそれにもなう北太平洋海域の活況は、イギリス人がふたたび日本にあらわれる背景となったのである。

展示(Ⅰ期)では、「七つの海」にへだてられた日本とイギリスが、世界情勢の波を受けながら離れ、また近づく過程を、当館所蔵資料を中心に紹介していきたい。(吉崎雅規)

《参考文献》

- 吉崎雅規『幕末江戸と外国人』同成社、二〇二〇年/石田千尋『日蘭貿易の史的探究』吉川弘文館、二〇〇四年/日蘭学会・法政蘭学研究会編『和蘭風説書集成』上巻、吉川弘文館、一九七六年/松尾晋一『江戸幕府と国防』講談社、二〇一三年/木村和男『毛皮交易が創る世界』岩波書店、二〇〇四年/横山伊徳『開国前夜の世界』吉川弘文館、二〇一三年

関東大震災写真の分析方法

—ガラス乾板に残る被災地情報—

今日のデジタルカメラの技術には及ばないまでも、ガラス乾板に残された高精度な画像情報は被災地の状況を詳細かつ鮮明に現在に伝えている。企画展示「レンズ越しの被災地、横浜—写真師たちの関東大震災—」では、西野写真館旧蔵関東大震災ガラス乾板写真（以下、「西野写真」）の特性を最大限に活かし、写真を大きく引き伸ばして展示したほか、

一部の写真に関しては部分拡大を行い、被災地の状況を提示した。

さて、関東大震災に関する写真は、プリントや絵葉書、写真集、災害誌など様々な形で現在に残っているが、①いつ、②どこで、③誰が、④何のために撮影したのか、これらが判然とする写真は極めて少ない。前号でも述べた通り、西野写真では、①九月中旬に、②横浜市街中心部を③西野芳之助が撮影したことが明らかになっている。また、④についても被災地の記録とともに、解説



図I 横浜市惨害、居留地 1923(大正12)年9月 当館蔵

文の存在から国内外に発信していくことを考えていたと推察できる。

ただし、瓦礫が多く、目標物の少ない山下町に關しては、詳細な撮影場所を特定するのは容易ではない。だが、ガラス乾板に残る被災地の情報を分析することで、撮影場所の特定が可能となった。そこで今回は、山下町九〇番地、現在の横浜中華街付近を撮影した「横浜市惨害、居留地」(図I)を例に、関東大震災写真の分析方法を紹介していきたい。



図II 山下町90番地付近の現状 2021(令和3)年2月撮影

山下町九〇番地

現在、山下町九〇番地付近には、小型食品スーパーがあるほか、大型の宴会場が所在する。また、道路の先には横浜中華街があり、人びとで賑わっている。図IIは図Iの現状を撮影したものである。二つを比較すると、道路に変化がない点が見える。

この写真が山手町九〇番地付近だとわかった根拠は、図Iの左側奥、石造の洋館にある。同時期の住所録を確認すると、山下町九〇番地にはスイス系商社のシーベル・ヘグナー社があった。入口付近を拡大し



図IV 瓦礫の山



図III 山下町90番地の印



図Ⅳ 現存する石垣 2021(令和3)年2月撮影



図Ⅴ 旧シーベル・ヘグナー社の石垣



図Ⅵ 公設人力車駐車場の柱



図Ⅶ 焼け野原となった中華街

た図Ⅲのように、建物の印から所在地の地番が九〇番とわかる。図Ⅱと比較すると、ここに現在は大型の宴会場が建っている。
崩れた建物の前には、瓦礫の山が確認でき、数台の自動車を押し潰し

ている(図Ⅳ)。瓦礫に埋れたハンドル部分がわかる。また、建物の装飾部分も確認できるほか、石や煉瓦など、洋館を構成する材料も写っている。震動が山下町の洋館を破壊した様子がかがえる。

外国の商館や銀行、会社、ホテルなどが建ち並ぶ山下町は、激しい震動で大部分の建物が倒潰、瓦礫が道を塞いでいった。写真の山下町九〇番地付近の瓦礫は撤去されているものの、被害の一端がわかる。

現在に残る石垣

図Ⅰ左端手前の場所も山下町九〇番地で、ここにもかつてシーベル・ヘグナー社の建物があった。注目すべきは、図Ⅴの石垣で、組み直されているものの、小型食品スーパー前に現存している(図Ⅵ)。横浜の近代史を語る遺構となっている。

さらにその横、焼け落ちた電柱部分には、「公設人力車駐車場」と書かれた柱が確認できる(図Ⅶ)。同じ場所を撮影した明治期の写真を確認すると、その時代からこの場所には人力車の駐車場があり、関東大震災時も機能していたことがわかる。高詳細な画像情報を含むガラス乾

板は、震災前の人びとの生活の痕跡を捉えたほか、近代遺構の元の姿を記録していたのである。この点は災害誌掲載写真など画像の荒い複製ではわからない点であろう。

焼けた中華街

図Ⅰの中央、焼け野原となった場所は現在の横浜中華街である。図Ⅷの拡大写真は加賀町警察署周辺の状況を捉えている。煙は旧内田造船鉄工所(山下町一一三番)前に置かれた石炭が燃えているもので、堀川沿いを撮影した「横浜市惨害、前田橋方面」でも同じ状況が確認できる。

横浜市役所市史編纂係編・発行の『横浜市震災誌』第二冊(一九二六年)によれば、狭い空間に古い煉瓦造の建物が密集した中華街では、地震によって大部分の建物が倒潰、さらにその直後の火災で大きな被害を受けた。避難する余裕もなかったため、横浜在住の約五〇〇〇人の華僑のうち、約二〇〇〇人がここで犠牲になったという。焼け野原の状況は中華街の惨状を伝えている。

以上のように、写真原板である西野写真の特徴を活かしつつ、写真の細部を検討することで、撮影場所を特定することができる。また、現状写真や文献資料などと比較することによって、被災地の様子も浮かび上がってくる。今後、さらに調査研究を進め、横浜の関東大震災写真の体系化作業を進めていきたい。

(吉田律人)

幕府海軍の拠点 横浜

幕末期の横浜が諸外国との貿易をけん引した開港地であったことは周知の通りだが、幕府が創設した洋式海軍の拠点の一つであったことはあまり知られていない。

嘉永六（一八五三）年六月、ペリーが蒸気船を率いて浦賀に來航したため、幕府有司は既存の海防体制の限界を認識し、軍艦を主力とする海防強化策に傾斜していく。同年九月に大船建造の禁を解き、翌年には横浜村で水戸藩の洋式帆船旭日丸の儀装

工事を行っている（阿部征寛「横浜村の造船所（儀装場）」『開港のひろば』第二六号、一九八九年）。安政二（一八五五）年にはオランダ人教官を招聘して長崎海軍伝習を開始、同四年に築地軍艦操練所（軍艦教授所）を設置、同六年に艦船を統轄する軍艦奉行を任命して幕府海軍の礎を築いていく（拙著『幕末の海軍』吉川弘文館、二〇一八年）。

今回は幕府海軍の拠点としての横浜に焦点を当て、その役割について検討していきたい。

浪士を取り締まる軍艦

横浜警衛のため対岸の神奈川沖には軍艦が配備された。その契機となったのは、安政七（一八六〇）年三月三日に起こった水戸・薩摩の尊王攘夷派浪士らによる大老井伊直弼暗殺事件（桜田門外の変）である。

浪士による横浜襲撃を警戒した幕府は同年閏三月、軍艦奉行直轄の蒸気船朝陽丸と帆船鵬翔丸を神奈川沖に

派遣し、神奈川奉行と連携しながら警衛体制を強化した（『続通信全覽』類輯之部警衛門「湾内哨船」）。また、時を同じくして、江戸内海の出入口にあたる浦賀では浪士取締のための警衛船が動員されるようになり（沖番船出役）、必要に応じて神奈川沖の軍艦に通報するという広域的な取締体制が整備された（『新横須賀市史』資料編近世Ⅱ・No.二八）。

神奈川沖には浪士取締のため様々な幕府軍艦が配備されたが、遣米使節に随行して太平洋を横断した蒸気船咸臨丸もその中の一隻であった。万延元（一八六〇）年六月二十七日、帰国間もない咸臨丸は鵬翔丸に代わって配備され、文久元（一八六一）年四月にボサドニック号事件の交渉

のため対馬へ派遣されるまでの間、横浜警衛にあたった。咸臨丸とともに横浜警衛にあたったのが蟠龍丸である。蟠龍丸は安政五（一八五八）年七月にイギリス女王から幕府に贈呈された蒸気船である。修復が必要になった朝陽丸に代わって配備され、浪士襲撃の状況に応じて神奈川・築地・品川などの沖合を頻繁に航行、警衛に従事した（慶應義塾図書館編『木村撰津守喜毅日記』塙書房、一九七七年）。

軍艦奉行在任中の木村喜毅は軍艦操練所のある築地から横浜・神奈川方面へたびたび出張している。例えば、万延二（一八六一）年二月一日、神奈川沖の咸臨丸を視察して同日に宿泊、同年八月一日にも同所

の蟠龍丸に宿泊している。この間、五月二八日に高輪東禅寺のイギリス公使館が尊王攘夷浪士に襲撃されるという第一次東禅寺事件が起こっている。木村の日記（五月二十九日条）には「昨夜高輪東禅寺英人宿寺へ浪人体の者多人数押し込み

の者多人数押し込み

乱妨に及び候に付き、神奈川御警衛船々乗組へ、なお心得方等急御用状を以て申し達す」（『木村撰津守喜毅日記』。原文は書き下し文に改めた）とあり、六月四日に自ら横浜・神奈川に向かっている。

咸臨丸には軍艦操練所教授方出役を務めていた福岡金吾（天璋院御広敷添番）や松岡磐吉（江川英敏鉄砲方手付当分出役）、蟠龍丸には同じく柴弘吉（江川英敏鉄砲方手代）や荒井郁之助（小十人組）が乗り込み、指揮にあたっていた（万延元年七月時点。国立公文書館所蔵内閣文庫「御軍艦操練所伺等之留」）。

幕府と通商条約を結ぶため来日していたスイス使節団の一員カスパー・ブレンワルドの日記（一八六三年五月三一日条）によると、幕府の対外交渉を担当する外国奉行が「浪人の襲撃に備えるにしても、江戸は道も入り組み、逃げ込む場所も

たくさんあるので、横浜の方がずっと良く防衛できると答えた」（『横浜市ふるさと歴史財団・ブレンワルド日記研究会編『スイス使節団が見た幕末の日本』勉誠出版、二〇二〇年）とある。横浜では外国人居留地周辺に関門や屯所が置かれ、沖合には幕府軍艦が配備されており、江戸よりも外国人警衛に適していると考えられていた。ところが、スイス使節団は活動拠点である江戸の長応寺を離れて横浜へ行くことに納得しなかった。そのため、外国奉行から「まだ三〇〇人から四〇〇人ぐらいの浪人が外国人を襲撃しようとする目論みで徘徊しているの、不幸な事故を避けるためにも、これらの浪人を捕縛するまでは横浜に戻って欲しい」（同書六月一日条）と説得されている。結局、スイス使節団は蟠龍丸に乗り込み、六月八日（和暦四月二二日）に横浜へと移送された。

文久二（一八六二）年八月の生麦事件や同年一二月のイギリス公使館



図1 木村喜毅 木村喜昭氏寄贈
（慶応4年頃） 当館蔵



図3 描かれた横浜製鉄所 「増補再刻御開港横浜之全図」
〔慶応2年頃〕 当館蔵



図2 建設中の横浜製鉄所 フェリックス・ベアト撮影 幕末期
当館蔵

焼き討ち事件など外国人襲撃事件は多発していたが、未遂に終わった襲撃計画はさらに多かつたことだろう。幕府は外国人で賑わう横浜を浪士の襲撃対象と想定し、軍艦を配備することで警衛の強化を図っていた。江戸内海は異国船と対峙するための海防の拠点であったが、横浜開港を機に、外国人を守衛する、浪士取締の拠点としての役割も果たすようになっていたのである。

蒸気船修復と横浜製鉄所の設置

幕府海軍の活動を支える蒸気船はヒト・モノ・カネの輸送や海難外国船の搜索、沿海測量など、様々な目的で運用された（金澤裕之『幕府海軍の興亡』慶應義塾大学出版会、二〇一七年）。しかしながら、蒸気船の数は限られていたので酷使せざるを得ず、船体や蒸気機関・船具などは頻繁に破損していた。幕府海軍が恒常的な修復場としていたのは浦賀であるが、横浜でも蒸気船は修復されている。

元治元（一八六四）年一二月、軍艦奉行並（軍艦奉行を補佐）は破損した蒸気船翔鶴丸を横浜で修復するに際し、軍艦組・軍艦操練所稽古人を派遣してフランス人から修復技術の伝習を受けようと計画している（国立公文書館所蔵内閣文庫「御軍艦所之留」）。フランス人が所有する洋式の修理道具が横浜にあることから、翔鶴丸を移送せよと幕閣から沙汰があり、それを受けての計画で

あった。元治二（一八六五）年三月、軍艦奉行は、フランス人とともに横浜での翔鶴丸修復作業に従事していた水夫・火焚の胸服が「大破」しており、体裁が良くないため新たに仕立てたいと幕閣に上申している（御軍艦所之留）。このことから、実際にフランス人の伝習を受けながら修復作業が進められていたと考えられる。

横浜での翔鶴丸修復を担当した幕臣の一人が栗本瀬兵衛（鋤雲）である。栗本は旧知の間柄であったフランス公使館通訳メルメ・カシオンを通じて伝習を実現させ、その流れで横浜製鉄所の管理運営を小栗忠順とともに担当することになる。横浜製鉄所は現在のJR石川町駅付近に位置し、慶応元（一八六五）年八月に建設工事を終えている。ただし、同年九月二七日に鉄入式が行われた横須賀製鉄所と比べると小規模であり、主に蒸気機関の製造・修復などを担った。

外国艦船の見本市

外国商館が立ち並ぶ開港地横浜は、蒸気船の購入窓口でもあった。万延二（一八六二）年正月、軍艦奉行はオランダ人が持ち込んだ河川航行用の小形蒸気船購入を検討している。神奈川奉行所役人立会のもと軍艦操練所教授方が横浜で同船を視察したところ、「軍備等に相用い候船形にこれ無し、西洋諸国において湾中または大川等にて旅行の者あるい

は商荷物等運送いたし候船にて、御国押送船同様の儀にて、船形は勿論、蒸気機関等も手薄に候間、大洋航海は相成り難し」（御軍艦操練所同等之留）」という代物であることが判明した。とはいえ、品川沖に急行する場合や江戸内海の航海用としては支障がない。そこで購入を申し出たが、幕府財政を担当する勘定奉行・同吟味役にあえなく却下されている。

軍艦奉行並を務めた勝海舟も日記の文久二（一八六二）年九月一日条に「戸部に到り、鎮台竹本え示談、即刻横浜会局に到り、英商の鉄船両隻を見る、一は新造、頗る佳なり」（『江戸東京博物館史料叢書勝海舟関係資料 海舟日記（一）』）と記している。勝は一八日の試運転で蒸気機関が良好であることを確認して購入を決断、一〇月一三日に再度横浜を訪れて「鉄船」を受け取っている。この「鉄船」は「順動丸」と命名され、浪士を取り締まる銃手・剣士・通訳の横浜移送、將軍徳川家茂上洛時の摂海視察などに用いられた。

開港地横浜は幕府海軍の拠点の一つとして、浪士取締や蒸気船の修復・購入窓口といった役割を果たしていた。当館では軍艦奉行木村喜毅をはじめ、咸臨丸艦長小野友五郎、船大工鈴木長吉など幕府海軍関係者の資料を収蔵している。これらの資料の活用を通じて、幕末期横浜と幕府海軍との関わりは、より一層明確になることだろう。（神谷大介）

「日本の灯台の父」R・H・ブラントン (Richard Henry Brunton) の旧蔵資料



図1 ブラントン肖像写真
1860年代

手がけた、いわゆる灯台は二六基を数える。北は北海道根室市の納沙

た。
①六連島(むつれしま) 灯台
一八七一(明治四)年竣工、石造、下関市六連島所在
②部埼(へさき) 灯台
一八七二(明治五)年竣工、石造、北九州市門司区部埼所在
③犬吠埼(いぬぼうさき) 灯台
一八七四(明治七)年竣工、レンガ造、銚子市犬吠埼所在
④角島(つのしま) 灯台
一八七五(明治八)年竣工、石造、下関市角島所在

この四基の灯台の築造を主導したのが、スコットランド生まれのイギリス人土木技師、R・H・ブラントン(一八四一〜一九〇一)である。ブラントンは、日本政府に雇われて一八六八(慶応四・明治元)年に来日し、七六(明治九)年に帰国するまでの八年間、灯台築造に携わった。

今年(二〇二〇)年、国内で初めて、次の現役灯台四基が、国の重要文化財(建造物)に指定された(竣工年順)。

布岬(のさつぷみさき) 灯台から、南は鹿児島県大隅半島の佐多岬(さたみさき) 灯台であり、そのほとんどが現役である。

今年(二〇二〇)年、国内で初めて、次の現役灯台四基が、国の重要文化財(建造物)に指定された(竣工年順)。

今年(二〇二〇)年、国内で初めて、次の現役灯台四基が、国の重要文化財(建造物)に指定された(竣工年順)。

今年(二〇二〇)年、国内で初めて、次の現役灯台四基が、国の重要文化財(建造物)に指定された(竣工年順)。

今年(二〇二〇)年、国内で初めて、次の現役灯台四基が、国の重要文化財(建造物)に指定された(竣工年順)。

今年(二〇二〇)年、国内で初めて、次の現役灯台四基が、国の重要文化財(建造物)に指定された(竣工年順)。



図2 ブラントン愛用の灯台視察船ターボル号(Thabor) 落合素江画 1870(明治3)年頃

* 図2点は、E.M.ウォーホップ(Wauchope)氏寄託「ブラントン旧蔵資料」より

ブラントンは「横浜のまちづくりの父」とも呼ばれ、横浜の近代史にも大きな足跡を残した。この活躍も次の機会に紹介したい。(中武香奈美)

ブラントンは「横浜のまちづくりの父」とも呼ばれ、横浜の近代史にも大きな足跡を残した。この活躍も次の機会に紹介したい。(中武香奈美)

ブラントンは「横浜のまちづくりの父」とも呼ばれ、横浜の近代史にも大きな足跡を残した。この活躍も次の機会に紹介したい。(中武香奈美)

ブラントンは「横浜のまちづくりの父」とも呼ばれ、横浜の近代史にも大きな足跡を残した。この活躍も次の機会に紹介したい。(中武香奈美)

ブラントンは「横浜のまちづくりの父」とも呼ばれ、横浜の近代史にも大きな足跡を残した。この活躍も次の機会に紹介したい。(中武香奈美)

ブラントンは「横浜のまちづくりの父」とも呼ばれ、横浜の近代史にも大きな足跡を残した。この活躍も次の機会に紹介したい。(中武香奈美)

▼企画展

横浜開港資料館開館40周年記念
七つの海を越えて

(1) 「鎖国」下の日本とイギリス

会期：2021年4月24日(土)～7月11日(日)

(2) 幕末の日英関係

会期：2021年7月17日(土)～11月7日(日)

近年、政治・経済・安全保障など多くの面で関係を深めつつある日本とイギリス。その両国の関係のはじまりは江戸時代初期にさかのぼります。

1613年、イギリスのセーリスが日本を訪れ、両国は貿易関係を開始しました。世界情勢の変化によって直接の交流はいったん途絶えますが、イギリスはアジアへの進出をはかるなかで、18世紀の末から日本近海に再び姿を現します。1859年の開港後、多くのイギリス商人が横浜をはじめとする開港都市に居留し、貿易を開始。また、東アジアに展開した海軍力を背景に、イギリスは幕末期の日本の政治・社会に大きな影響を及ぼしました。

当館では、日英関係のあゆみを示す歴史資料を多数所蔵しています。本展では、イギリス人が見た日本の様相と日本人の見たイギリス(人)の姿を、旅行記、地図、絵画、古写真、古文書など多様な資料から紹介しつつ、「七つの海」を越えて強いつながりを築くにいたった日英関係の源流を考えます。

資料館 だより

▼関連講座「鎖国」下の日本とイギリス

日程：2021年6月19日(土)

会場：横浜開港資料館 講堂

定員：40人、参加費：500円

*事前予約制 申込方法など詳細は、決まり次第当館ホームページ等でお知らせします。

▼濱ともデーについて

2022年3月31日までの毎月第2水曜日に濱ともデーを開催します。

この日は、横浜市内在住65歳以上の方限定で、入館料が無料となります。

*ご入館の際に「濱ともカード」をご提示ください。

▼寄贈資料

・宮田吉秀家文書 311件 (宮田吉秀氏)

▼閲覧室での資料閲覧利用について

閲覧室のご利用は、事前予約制(先着順)です。

閲覧希望日前日の正午までに、電話で予約してください。予約なしでの入室はできません。

*詳細は、当館ホームページでご確認いただくか、電話でお問い合わせください。

開室時間 10:00～12:00、13:30～15:30

休室日 月曜日・火曜日(祝日の場合は翌日)、資料整理日、年末年始など

電話番号 045-201-2150

電話受付時間(開室日のみ)

10:00～12:00、13:00～16:00

▼twitter 配信中

展示や所蔵資料のほか、開港資料館の「今」の情報をお届けします。

twitter @yoko_archives

休館日・休室日のお知らせ

(4/24～7/11)

展示設営及び資料整理のため、以下の日はお休みさせていただきます。なお、毎週月曜日は通常の休館日となり、閲覧室は毎週月曜日・火曜日ともに休室いたします。

*6/23(水)～6/25(金)は資料整理週間のため、閲覧室は休室いたします。

展示室	5/6(木)
閲覧室	4/30(金)、5/7(金)、6/23(水)～6/25(金)、6/30(木)

*今後の状況により、開館日や開催内容等を変更する場合がございます。最新情報は、当館ホームページ(<http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>)でご確認ください。